

(1) 釜石市への支援

本市は、発災から暫くの間、特定の自治体を意識することなく、国等の関係機関からの要請に基づき、東北各地に職員を派遣し支援活動を行っていた。

しかしながら、これでは、単発の支援を繰り返すだけで、被災地の状況やニーズに応じた支援ができないことから、特定の自治体に対し本市の特徴や強みを活かした支援を行うべきという機運が高まり、本市は岩手県釜石市に対し積極的かつ継続的な支援を行うことになった。

①きっかけ

釜石市と本市はともに「製鉄のまち」としての共通点を持ち、震災以前より、製鉄関連の史跡や施設等の世界遺産登録を目指す「九州・山口の近代化産業遺産群」世界遺産登録推進協議会に属する間柄であった。

さらに、震災3日後に、厚生労働省の要請で派遣した本市保健師の活動場所が釜石市であった。

このようなことから、本市から釜石市に対し支援の打診を行ったところ「是非ともお願いしたい」との回答があり、その後、避難所運営支援をはじめ、継続的な支援が始まった。



釜石市内の避難所
(釜石市・旧釜石第一中学校避難所)

②支援の概要

○市職員の派遣

釜石市担当者との協議を通じて把握する現地の状況やニーズをもとに、専門分野の知識やノウハウを有する本市職員を随時派遣している。(367人/4,534人日)

※これまでの釜石市への派遣実績(別表)

○支援物資

市では、これまで市民や企業から寄せられた支援物資を釜石市へ10回搬送した(市全体の搬送回数:18回)。

○市民・企業等による支援

本市の釜石市に対する行政支援が徐々に定着し、市民や企業等でも釜石市を対象とする支援活動が行われるようになってきた(ボランティア派遣、義援金・メッセージ・物品等の贈呈等)。



北橋市長も被災地を訪問
(釜石市 5/14)

③釜石デスク

避難所運營業務への職員派遣以降、本市は釜石市の要請に応じ、廃棄物処理及び市民課業務に係る職員を派遣した。またその後も、選挙事務や都市計画部門等における職員派遣を予定していた。

さらには、本市を参考に、スマートコミュニティ事業を復興計画に盛り込むことが検討され、この分野での支援も予定されていた。

一方、6月定例会において、議会より、釜石支援を充実させるため、現地に事務所を設置すべきとの提案もあった。

このような経緯を踏まえ、連絡窓口となる本市職員を常駐させ、支援に係る具体的なアドバイスや本市関係部局との連絡調整などを迅速かつ円滑に行うことを目的として、8月1日、「北九州市・釜石デスク」を開設した。

「支援先を特定し」「現地に常駐者を置く」本市の支援方式は、全国的にも珍しい試みである。

○業務内容

- ・復興支援に係る釜石市との連絡調整
- ・釜石市の復興に資する本市施策に係る助言
- ・釜石市で支援活動を行う本市職員の総括 など

○設置場所

釜石市役所第3庁舎 釜石市復興推進本部内

○スタッフ

総務企画局釜石支援担当課長（土木職）	1人
現地採用スタッフ	1人



釜石市役所内に設置

④これまでの取り組みの成果

○スマートコミュニティ事業

釜石市長が6月に本市を訪れた際、「釜石市民が将来に希望を抱けるような事業が必要」との発言があったことから、本市が東田地区で展開しているスマートコミュニティ事業を釜石市の新しいまちづくりに活かすことを提案した。

その後、両市の担当者による検討や協議を経て、釜石市は、復興計画の柱の一つとしてスマートコミュニティの導入を掲げ、検討を開始した。

これまで、釜石デスクや環境局担当者による助言、国の補助事業申請への協力、「釜石市スマートコミュニティ事業化検討委員会」への参画などを通じて、支援を行っているところである。

○環境未来都市の指定

昨年12月、釜石市は、本市とともに環境未来都市に指定された。

提案書を作成するに当たり、釜石デスクをはじめ関係部局が助言等を行った。

○両市の市民レベルでの交流

- ・本市の市民や企業による釜石市への義援金や物品の贈呈
- ・避難所で本市職員とともに運営に当たった自治会長や教職員が、お礼の意を伝えるために本市を訪問
- ・本市のイベントにおいて、釜石の物産を販売 など



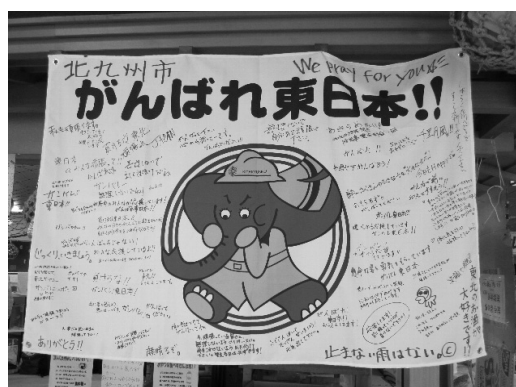
沼小学校(小倉南区)から釜石小学校に贈られた応援パネル 7/18



花房小学校(若松区)から避難所に贈られた折鶴 8/1



メッセージ入りうちわ(北九州市立大学学生) 5/28



避難所に贈られた応援旗(消防局)



「小倉食市食座」軽トラ市に釜石から出店 2/26

<別表>釜石市への派遣実績

	概 要	派遣期間	派遣人数
保健師	<ul style="list-style-type: none"> ・本市職員による初めての釜石市での支援活動。 ・厚生労働省の要請を受け震災から3日目に派遣。 ・業務内容：避難所や仮設住宅を巡回しながらの避難者の健康管理等 	3月14日～（継続中） ※12月末までは約1週間で交代。1月より1.5月で交代（計45回派遣）	合計118人 （949人日）
避難所運営	<ul style="list-style-type: none"> ・「避難所に釜石市職員を配置しているため、本来業務が滞っている。是非、避難所運営をお願いしたい」との申し出を受け、派遣を決定。 ・当時、65箇所ある避難所のうち、5箇所（後に3箇所）を本市職員が担当。 ・業務内容：避難者と寝食を共にしながらの避難所運営に係る業務全般（物資、食事、施設管理、避難者のケアなど）。 	4月21日～8月2日 ※8泊9日毎に交代（計17回派遣）	合計195人 （1,711人日） ※1箇所につき2～3人を配置
震災廃棄物	<ul style="list-style-type: none"> ・5月、釜石を訪問した北橋市長と野田市長との協議をきっかけに派遣が決定。 ・本市の震災支援で初めての長期派遣。 ・業務内容：震災廃棄物に係る処理計画策定、委託契約、国庫補助申請手続等 	6月2日～3月31日	合計7人 （475人日）
戸籍・住民票	<ul style="list-style-type: none"> ・業務内容：戸籍・住民票届出の受付、証明書発行、関係書類の整理等。 	6月26日～9月15日 11月14日～12月23日 ※半月毎に交代（計7回派遣）	合計25人 （460人日）
選挙事務	<ul style="list-style-type: none"> ・業務内容：「岩手県知事・県議、釜石市議選挙（9/11投開票）」及び「釜石市長選挙（11/13投開票（→無投票）」に係る選挙事務全般 	8月21日～9月14日 10月30日～11月8日 ※半月毎に交代（計3回派遣）	合計9人 （108人日）
住民税申告受付	<ul style="list-style-type: none"> ・業務内容：税証明の発行、住民税の申告受付、軽自動車税（廃車）申告書受付 	8月31日～11月5日 ※1週間毎に交代（計7回派遣）	合計8人 （66人日）

区画整理・ 集団移転	<ul style="list-style-type: none"> 釜石市の身分も併せ持つ「自治法派遣」の第一号。 業務内容：区画整理及び集団移転等に係る業務（事業手法検討、各種調査、住民説明、資金計画、土地・建物評価等） 	10月2日～（継続中）	合計2人 (322人日)
漁港 整備	<ul style="list-style-type: none"> 業務内容：地震及び津波により地盤沈下や施設損壊が生じている漁港の災害復旧に関する業務（計画策定、工事発注、監督等） 	1月13日～（継続中）	合計1人 (60人日)
釜石 デスク	<ul style="list-style-type: none"> 業務内容 <ul style="list-style-type: none"> ①復興支援に係る釜石市との連絡調整 ②釜石市の復興に資する本市施策に係る助言 ③釜石市で支援活動を行う本市職員の総括 など 	8月1日～（継続中）	合計2人 (383人日) ※うち1名は 現地採用ス タッフ



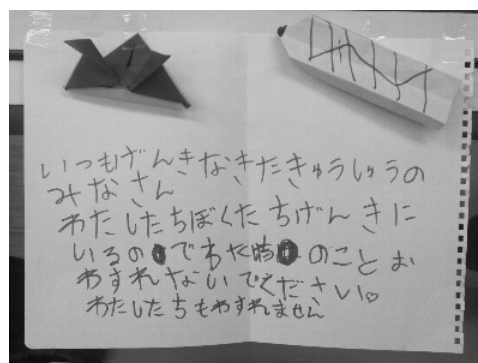
釜石市・市民体育館避難所



避難所で活動する本市職員
(釜石市・旧釜石第一中学校避難所)



避難所で活動する本市職員
(釜石市・旧釜石商業高校避難所)



避難している子どもからの手紙
(避難所運営支援)

<参考>釜石市の被災状況（平成23年11月18日 釜石市災害対策本部発表資料より）

①地震・津波の概要

- ・震度 震度6弱／釜石市中妻町、震度5強／釜石市只越町
- ・津波 第一波 11日14時45分 引き0.1m
最大波 11日15時21分 4.1m以上（観測地点の観測値）
9.3m（痕跡等からの推定値）

※土木学会参考値

浸水高 9.2m（平田漁港付近）

遡上高 19.3m（両石漁港背後地）

②災害対策本部設置 3月11日 14時46分

③避難状況

避難指示発令 3月11日 14時49分

避難指示解除 3月13日 17時58分

避難指示対象 6,354世帯 14,710人

④人的被害（人口39,996人（H23.2末））

死亡者数 885人

行方不明者数 176人

最大避難者数（市内避難所） 88箇所 9,883人

（内陸避難） 29施設 633人



押し寄せる津波（釜石市・澤田幸三氏撮影）

⑤家屋被害

住家 4,548戸（全壊2,954、大規模半壊396、半壊291、一部損壊907）

非住家 795戸（全壊433、大規模半壊151、半壊142、一部損壊69）

⑥産業・公共土木の被害

水産関係被害 225億2,000万円

農林関係被害 29億9,830万円

公共土木施設被害（市工事分） 8億7,600万円（83箇所）

経済損失 第二次産業 136億4,900万円

第三次産業 392億5,700万円



釜石市唐丹町小白浜



校舎3階に車（釜石市・鶯住居小学校）

北九州市・釜石デスク 東課長へのインタビュー 平成 24 年 3 月 1 日

8 月より、総務企画局釜石支援担当課長として「北九州市・釜石デスク」で活動続ける東義浩課長に、インタビューを行いました。

――釜石市の現況について教えてください。

中心部では、散乱したガレキの撤去を終え、被災した建築物の解体が順次進んでいるので、至る所で重機やトラックを見かけます。こうした中、釜石市は昨年 12 月に公表した復興基本計画をもとに、具体的な土地利用について地元説明を続けています。

また、復興元年と呼ばれる平成 24 年度に向けて、災害公営住宅（復興住宅）に係る設計・工事の準備や、防災集団移転のための調査や用地取得の準備が進んでいます。



――釜石デスクの活動内容について教えてください。

関係者との打ち合わせや住民説明会に参加するなど、殆どの時間、釜石市職員と行動をとっています。

復興の状況や地元ニーズを的確に把握したうえ

で、本市での経験やノウハウを生かしたアドバイスを行うとともに、職員の派遣や物資の支援に係る関係部局との調整などを行っています。

――釜石市や釜石市民に対してどのような印象を持ちましたか。

赴任直後からこれまでに多くの方々と接してきましたが、一言で言えば「我慢強い」人が多いように感じています。特に市職員の中には、ご自身が被災したにもかかわらず、市民のためにといった強い使命感のもと、長期間にわたって休暇返上で働く人もあり、その姿勢には心打たれるものがあります。

――これまでで、嬉しかったこと、良かったことなどあれば教えてください。

生まれ故郷を離れ、見知らぬ土地での生活を通じ、市職員を含めた多くの釜石市民と出会い、交流を深める中で、貴重な財産である新たな友人を得ることができました。

また、これまで釜石に派遣された本市職員ひとりひとりの活躍のおかげで、どこに行っても「北九州市にお世話になっている」、「足を向けては寝られない」など、多少オーバーな面は否めませんが、北九州市全体が高く評価されていることを誇りに思っています。

――反対に、苦労したこと、失敗したことなどあれば教えてください。

まずは釜石の地や釜石市役所に溶け込むことを最優先に活動したため、週末は地元説明会やワークショップなどに出ずっぱりで、休暇が満足に取

れませんでした。ですが、釜石市職員の働き振りを見ると弱音は吐きませんでした。

また、直接的に業務には関係しませんが、釜石市には菊池、佐々木、川崎、鈴木といった苗字が多く、職員同士が名前で呼び合うため、顔と名前を一致させるのに未だに苦労しています。

――本市派遣職員の活動状況について教えてください。

発災直後の保健師の派遣に始まり、避難所運営、災害廃棄物の処理計画策定、市民課や税務課の窓口業務、選挙事務、復興計画策定などの業務に400名近くが携わってきました。

現在（H24年3月）は、保健師1名が仮設住宅などの住民の心と身体のケアを、土木職3名のうち2名が具体的な復興計画づくりを、また残りの1名が漁港の復旧に、さらに事務職1名が災害廃棄物処理の監理を行っており、これに釜石デスクの1名を加えると合計6名が活動しています。



――北九州市と釜石市の共通点及び相違点があれば教えてください。

釜石市の面積は約440km²で本市と同規模ですが、リアス式海岸特有の険しい山々に囲まれ、平地部は面積の1割程度です。さらにその平地部に大規模な工場が立地していることから、市民が土地を確保することは容易ではないようです。

また被災により在りし日の姿は見る影もありませんが、

漁業で知られた町らしく、海沿いには数多くの水産加工業関連施設が立ち並んでいた模様です。

職員の気質といった面から見れば互いに産業のまちで、市職員がまちの展望を開くため精力的に動いている点は非常に似通っていると思います。このような共通項があるためか、一緒に業務に携わっていても、遠い地の市役所で働いていることを感じさせません。

一方、約400名の職員で幅広い分野の業務を行わねばならず、業務が細分化された本市とは異なり、それぞれの職員が多方面の知識を習得しているように感じています。

また、国だけではなく岩手県との関係も重要で、政令市には分からない苦労もされているようです。

――東北の冬を経験されましたが、寒さは大丈夫でしたか。

地元の方々が「今年の冬は特別寒い」と口にするように、最高気温が氷点下といった寒い日が続きました。宿舎の窓ガラスの結露が凍り、車の窓ガラス上で空気中の水蒸気が結晶化するという現象を始めて目の当たりにし驚きましたが、仕事を休まなければならないような病気に罹らず、頑丈に育ててくれた両親に感謝しています。

――これまでの北九州市及び釜石デスクによる支援活動の成果をお聞かせください。

多くの釜石市職員との意思疎通により、新たに発生した選挙事務や税務事務などの支援や、本格的な復興に向けて設置された復興推進本部の支援のための人員派遣が円滑に進んだと考えています。

また復興基本計画の中に、非常時のエネルギー

確保といった観点を加えながらスマートコミュニティを盛り込むことができ、現在はマスタープランづくりの準備を進めています。

さらに、被災地向けに選定枠が増えた「環境未来都市」についても、釜石市職員の獅子奮迅の働きと、本市の政策調整課や環境未来都市推進室の全面的な協力により、短い構想策定期間ながらも選定されることができました。

一方、避難所運営に携わった職員を通じて芽生えた釜石小学校や地元自治会との交流では、釜石の皆さんが「お礼をしたい」と北九州市を訪問してくださいました。

また「ものづくりの絆プロジェクト」においても、23年末に復活した呑ん兵衛横丁の店舗で、割り箸やハンドソープといった北九州産の製品が使われるなどの実績を挙げています。

――今後の活動予定と今後の抱負についてお聞かせください。

今のところ帰還命令が出ていないので、24年度も釜石に駐在することになりそうです。

釜石では、これから本格的な復興のステージに入りますので、これまで築いた人脈を活かしてより一層の情報収集に努め、少しでも復興が早まるようなお手伝いをしたいと考えています。

また、24年度から増員予定の派遣職員とのコミュニケーションを円滑に行い、慣れない土地でも十分能力を発揮できるよう留意したいと考えています。

――今回の経験から、北九州市の職員及び市民に伝えたいことがあればお願いします。

被災地の方々には、月日の経過とともに国民から被災地の記憶が薄れていくことを危惧しています。

遠く離れた本市では、特に被災地の情報が伝わりにくいと思います。そこで、今後も細やかな情報発信に努めたいと考えています。

また、他都市を知ることは、自分のまちの長所や短所を再発見する貴重な契機にもなります。今後派遣される職員は、そのようなことも意識していただければと思います。

さらに、復興が始まる今すぐには難しいでしょうが、将来を見据えた市民レベルの交流が深まるようご協力いただきたいと思います。

復興基本計画では復興を成し遂げるまでに10年の月日が必要とうたっています。少なくともそれまでは市民の皆様や市職員の末永く、また暖かい支援をお願いいたします。



<ある日の一日>

- | | |
|-------------|----------------------------|
| 8:30～ 8:45 | 朝会（本日の予定報告） |
| 10:00～10:30 | 復興推進本部会議 |
| 11:00～12:00 | エネルギー事業者とスマートコミュニティに関する協議 |
| 13:00～13:30 | 北九州市三郎丸小学校による寄付金等贈呈 釜石小学校へ |
| 14:00～15:30 | 釜石市緑の分権改革推進協議会 |
| 16:00～16:30 | 本市派遣職員の職場訪問 |
| 18:00～20:00 | 東部地区地域懇談会（住民説明会） |

**北九州市・釜石デスク嘱託
和田昌子さんへのインタビュー
平成 23 年 12 月 21 日**

10 月より現地採用されている嘱託職員の和田さんに被災直後の様子などをインタビューしました。



――北九州市の求人に応募したきっかけは

私自身、津波で家を流され、仕事を求めています。北九州市からの求人をハローワークで見かけたとき、避難所で過ごした際に北九州市職員の方々がいらっしやっていて、縁を感じ応募しました。

――和田さんは避難所にいらっしやったのですね

地震が発生したときは当時の勤務先にいました。家が津波に流されたとの情報が入ったため、自宅に向かおうとしましたが、被災エリアは通行止めで立ち入ることができず、震災直後は消防団の詰め所に身を寄せました。100 人以上が寝泊りしていました。その後、市民体育館の避難所で 8 月 1 日まで過ごしました。

――避難所の生活はどうか

最初、避難所の運営は滞り気味でしたが、北九州市や東京の職員が来てからは、物資の整理がなされ、当番制で避難者にそれぞれ役割が決められるなど、スムーズな運営がなされるようになりました。

いろいろな被災者が同じところで生活するため、トラブルもありました。特に若い人はストレスがたまる傾向があったように思います。盗難も何度かあったと記憶しています。

――避難所での北九州市職員の様子は

最初は秋田県の職員が来ていたのですが、2～3 日程度で交代していました。

その後、北九州市の職員が来てからは 9 日間での交代となり、引継ぎがスムーズだったと思います。

――避難所生活で一番つらかったことは

夏場は毎日シャワーに入りたかったのですが、避難者が多くて、毎日入れる状況ではありませんでした。

――避難所から仮設住宅に移られて生活は変わりましたか

仮設住宅に移り、プライバシーがある程度、保てるようになりました。

ただ、家族 3 人で住んでいるのですが、部屋数が少ないので、着替えるときに困ります。

――最後に北九州市のイメージは

最初は八幡製鉄所があることしか知りませんでした。

しかし、嘱託職員に採用されてからは、工業の町であるとか、モノレール、高速道路も整備された大きな都市だと分かりました。

遠く離れた釜石市で職員に採用していただき、精一杯お仕事をさせていただきたいと思います。

**釜石小学校避難所
荻野哲郎自治会長
加藤孔子校長**

へのインタビュー

平成 23 年 12 月 21 日

本市が避難所運営を行った釜石小学校の加藤校長先生と校区自治会長に、被災直後や避難所で様子などについてインタビューしました。

――釜石小学校が避難所になったきっかけは

◆荻野自治会長

もともと、釜石小学校は市の指定避難場所となっていました。



――震災直後、どのくらいの方が避難されていたのですか

◆荻野自治会長

地震の直後は 700 人くらいの方が避難されました。

◆加藤校長

4 階建て校舎の教室ほとんどに避難していたと思います。

◆荻野自治会長

子供がいる避難者は、ミルクを作るためにお湯を沸かしたり、夜電気をつけたりする必要がある

ことから、一つの教室に集めるなどの配慮をしました。

――部屋割り等の避難所の運営は自治会長が主導で行ったのですか

◆荻野自治会長

そうですね。自分が主導しましたが、他にも自治会の役員が何人かいて、役割を決めていました。もともと、釜石市の第一号として、平成 7 年に自主防災組織を作っており、釜石市の防災訓練に参加してテントを何分で張れるかを競ったりしていました。今回の震災では、この組織がうまく機能しました。

――震災直後、自治会長はこの避難所にかけつけたのですか

◆加藤校長

地震の直後、荻野自治会長と公民館長がまっさきにかけてくれ、地震が 14 時 46 分に発生しましたが、15 時前には学校、自治会、行政の 3 者がそろっていました。

◆荻野自治会長

その後、どんどん避難者がやって来たため、学校に頼んでカラーのリボンを避難者、自治会役員等にそれぞれつけてもらい、登録がなされた方にはつけるようにして、はじめてきた方が分かるようにしていました。

◆加藤校長

次の日から安否確認でごった返すようになりました。そこで、避難されている方に名前、住所等を小さな紙に書いてもらい、それを玄関に張り出し、一目で安否が分かるようにしました。これは非常に有効な手段であったと思います。

ただ、私自身、被災者だという認識がなかったため、この紙を書き忘れて、しばらく行方不明者扱いになっていたようです。。

◆荻野自治会長

リボンや小さな紙切れでしたが、本当に役に立ってくれました。こういう配慮は災害が起きる前から考えておくべきです。

――いつごろ応援が到着したのですか

◆加藤校長

最初の一週間は学校の職員と自治会の役員さん方で切り盛りしていました。

廊下で寝たり、うとうと椅子で寝ることも多い状況でした。

◆荻野自治会長

とにかくごったがえしていたため、各教室を1つの班、体育館を3班に分け班長を決めました。

――避難所で一番困ったことは

◆加藤校長

食料がないことです。とにかく食べるものがなくて、次の日に近所の方から米をいただいたのですが、停電していて発電機を使っていたので、電流が一定せず、電気炊飯器でご飯を炊くことができないのです。すぐさま、ガスコンロを調達したのですか、鍋でご飯を炊くのはとても難しい。何度も失敗しました。

その食料も尽きてきたので、校庭に「SOS」を書きました。13日になり近くの料亭が食料を供給してくれるようになり、ほっとしました

◆荻野自治会長

それからはカップ麺やレトルト食品等が大量に到着したのですが、野菜不足が顕著になってきま

した。栄養がかたよってきて、ストレスを感じるようになってきました。

――避難所の運営で心がけていたことは

◆荻野自治会長

土足禁止にしたことです。衛生面を重要視しないと災害時はやっていけない。特に長期間の避難生活になると、最初が肝心。最初から土足禁止にしていないと意味がない。

◆加藤校長

人の出入りがかなり激しい状況だと、ほこりも舞うし、感染症の心配もありましたので、自治会長と相談して、とにかくスリッパでも裸足でもいいので、靴は脱いでもらうようにしました。



――4月中旬から北九州市が避難所の運営をお手伝いしましたが

◆荻野自治会長

八幡製鉄もあるので、北九州市の名前は知っていました。

また、橋野高炉を世界遺産にしようと、北九州市と一緒に活動していることも知っていました。

北九州市は一週間交代で来てくれたので、本当に助かりました。

――他に大変だったエピソード等お聞かせください

◆荻野自治会長

救援物資として古着ばかり到着して困りました。突然、宅配で到着したりして、断ったこともあります。置き場にも困りますから。



◆加藤校長

とにかく下着がなくて自衛隊に要請したこともあります。

◆荻野自治会長

避難生活後半になってくると、ストレスもたまってきたので、お酒を飲む人が増えてきたので、避難所では酒・タバコは禁止にしました。

◆加藤校長

ここは学校ということもあり、その辺は厳しくお願いしていました。

◆荻野自治会長

夏になってくると、ハエが大量に発生して悩まされました。そんなとき、北九州市さんがハエ取

り紙を送ってくれて、ほんとうに助かりました。

◆加藤校長

市内では手に入らなくなっていましたからね。

◆加藤校長

避難所生活が長期化していたので、習字教室やカルチャー教室を開いていました。毎日一時間でもいいから、文化的なことに触れてもらおうと。

◆荻野自治会長

避難所生活していた子供たちにも一時間勉強させたりしていましたよ。

◆加藤校長

最後の方では、仮設住宅の抽選に当たっていない子供がそれをすごく気にするようになっていました。たぶん保護者が焦っていたのでしょうね。

◆荻野自治会長

当たった人と当たっていない人で軋轢がうまれかねない雰囲気もありましたが、必ず仮設住宅には移れるから心配しなくていいよと声掛けしていました。最後の方は7月30日に決まりました。

◆加藤校長

途中から学校が始まり、学校と避難所の共存が課題となりましたが、自治会長がその辺をうまくまとめてくれたので助かりました。

◆荻野自治会長

あくまで学校をお借りしている気持ちは忘れてはいけないと思います。

――貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。

【釜石小学校】

釜石市沿岸部に位置するが、高台であるため津波の被害を免れた。

地震発生時、多くの児童は既にご下校していたが、日頃の防災学習の知識を活かしてそれぞれの判断で避難し、184人の児童は全員無事であった。

さらに、子どもたちは、自らが逃げるだけでなく、家族やお年寄りに避難を呼びかけ、多くの命を救った。

このことは、市内北部にある鶉住居小学校、釜石東中学校における子どもたちの避難行動とともに「釜石の奇跡」として、NHKクローズアップ現代ほかメディアでも多数紹介されている。

また、震災直後から避難所となり、8月10日の閉鎖まで地域住民を支える拠点になっていた。

北九州市の職員が運営支援を行った避難所の一つであり、本市職員は4月21日から8月2日まで、延べ42人が自治会長や教職員とともに活動を行った。



【教室での避難生活】



【体育館での避難生活（パーティションあり）】



【教室に積み上げられた支援物資】